

## 安田 喜憲 (やすだ よしのり)

### 〈経歴〉

- 1972年 東北大学大学院理学研究科修士課程修了。  
 1974年 東北大学大学院理学研究科博士課程退学。  
 広島大学総合科学部助手をへて、理学博士。  
 1994年 同センター教授  
 1997年～1999年  
 京都大学大学院理学研究科教授 (併任)  
 2002年 フンボルト大学客員教授  
 2006年4月 スウェーデン王立科学アカデミー会員 (現在に至る)  
 2007年 東京財団主任研究員 (現在に至る)  
 2007年11月 紫綬褒章受章  
 2008年 稲盛財団環境文明倫理研究センター所長  
 2010年 中山賞大賞受賞  
 2012年 東北大学大学院環境科学研究科教授  
 国際日本文化研究センター名誉教授  
 2013年 立命館大学環太平洋文明研究センター長

### プロジェクト

- 1991年～1994年 文部科学省重点領域研究「文明と環境」、  
 1997年～2001年  
 文部科学省 COE 拠点形成プロジェクト「長江文明の探求」  
 2006年～2010年 文部科学省基盤S「年縞による高精度の環境史復元と  
 稲漁撈文明の興亡」  
 ほか、経済産業省、環境省、日本経団連、東京財団などの委託研究事業  
 などのビッグプロジェクトのリーダーをつとめる。

### 専攻

専攻は、環境考古学。古代文明の比較研究。

### 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、共著の区別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 "Monsoon and Civilization"	共著	2003年3月	Lustre Press and Roli Books, Delhi	440p. Shinde, V. との共編著。そのうち安田の執筆部分は pp.12～19, pp.319～338、モンスーンアジアの風土と文明を論じた。(査読なし)。
2 『古代日本のルーツ 長江文明の謎』	単著	2003年6月	青春出版社	180p. 長江文明が日本文化の基層にあることを明示した。(査読なし)。
3 『文明の環境史観』	単著	2004年5月	中央公論新社	347p. 文明の生態史観に変わる新たな歴史観として文明の環境史観を提唱。(査読なし)。
4 『気候変動の文明史』	単著	2004年12月	NTT 出版社	265p. 気候変動と文明の興亡を論じる。(査読なし)。
5 『長江文明の探究』	共著	2004年8月	新思索社	239p. 梅原猛氏との共著、安田の執筆は全頁にわたる。長江文明の存在を世界で初めて解明した。(査読なし)。
6 『一神教の闇—アニミズムの復権』	単著	2006年11月	筑摩書房	238p. キリスト教を中心地とする一神教がかかえている闇を告発。(査読なし)。

7『環境考古学事始—日本列島2万年の自然環境史』	単著	2007年10月	洋泉社	346p.1980年に刊行した環境考古学に関する本書を現代版に改めたもの。(査読なし)。
8『生命文明の世紀—「人生地理学」と「環境考古学」の出会い』	単著	2008年2月	第三文明社レグルス文庫	205p.21世紀は生命文明の時代であることをはじめて指摘した。(査読なし)。
9『稲作漁撈文明—長江文明から弥生文化へ』	単著	2009年3月	雄山閣 東洋経済新報社	367p.稲作漁撈文明の存在を世界で初めて指摘した。(査読なし)。
10『山は市場原理主義と闘っている』	単著	2009年12月	Springer, Tokyo, Heidelberg London	333p.山を崇拝する心こそが森里海の水の循環系を守る稲作漁撈民の心であることを指摘。(査読なし)。
11” <i>Water Civilization: From Yangtze to Khmer Civilizations</i> ”	共著	2012年10月	ミネルヴァ書房	477p.編著、安田が執筆した部分は pp.3～63,pp.95～180,pp.313～362,pp.427～464 長江文明からクメール文明までの女性原理の文明の実態を世界で初めて報告。(査読なし)。
12『環境考古学への道』	単著	2013年1月		292p.環境考古学を確立するまでの研究自叙伝。(査読なし)。
(学術論文)				
1”Environmental variability in the East and West Eurasia”	共著	2003年5月	“Quaternary International”, Elsevier	ファースト・オーサー論文、Jorg F.W. Negendank との共著、Vol.105 pp.1～6(すべて安田執筆) 東洋と西洋の気候変動を詳細に比較検討した結果、氷期から後氷期の移行にともなうような大きな環境変動には時間的ずれが存在することをはじめて指摘した。(査読あり)。
2”Vegetation history during the Holocene from Lake Hyanho, northern Korea”	共著	2004年10月	“Quaternary International”, Elsevier	T.Fujiki 氏との共著論文、Vol. 123/125 pp. 63～69 (藤木氏との共同執筆) 韓国の東海岸の湖沼堆積物の花粉分析の結果、過去 8000 年間の環境史を解明した。(査読あり)。
3”The influence of climatic change on chestnut and horse chestnut preservation around Jomon sites in Northeastern Japan with special reference to the Sannai-Maruyama and Kamegaoka sites”	共著	2004年10月	“Quaternary International”, Elsevier	J.Kitagawa 氏との共著論文、Vol. 123/125 pp.89～103 (北川氏と共同執筆) 青森県三内丸山遺跡と亀ヶ岡遺跡の花粉分析の結果から、縄文時代のクリとトチの利用が気候変動に強く支配されていることを解明した。(査読あり)。
4”Environmental variability and human adaptation during the Lateglacial/Holocene transition in Japan with reference to pollen analysis of the SG4 core from Lake Suigetsu”	共著	2004年10月	“Quaternary International”, Elsevier	ファースト・オーサー論文、K.Yamaguchi, T.Nakagawa, H.Fukusawa, J.Kitagawa, M.Okamura,各氏との共著論文、Vol. 123/125 pp.11～19 (すべて安田執筆) 福井県水月湖の年縞の花粉分析の結果から 1万 5000年前の大きな気候変動と生態系の変動を詳細に解明した。(査読あり)。
5”Environmental archaeology at the Chengtoushan site, Hunan Province, China”	共著	2004年10月	“Quaternary International”, Elsevier	ファースト・オーサー論文、T.Fujiki, H.Nasu, M.Kato, T.Naruse.他各氏との共著、Vol. 123/125 pp. 149～158 (すべて安田執筆) 中国湖南省城頭山遺跡の発掘調査の成果を報告。中国最古の祭壇・水田址・焼成煉瓦の発見などかずかずの環境考古学の発見の成果が報告された。(査読あり)。

6" Environmental variability and human adaptation since the last glacial period"	共著	2004年10月	"Quaternary International", Elsevier	ファースト・オーサー論文、N. Catto 氏との共著、Vol. 123/125 pp. 1~6(すべて安田執筆) 東洋の稲作と西洋の麦作の起源を晩氷期の気候変動との対応の中で比較文明論的に論じた。(査読あり)。
7" Environmental variability and human adaptation in the Pacific Rim and the Sustainability of the Islands"	共著	2008年1月	"Quaternary International", Elsevier	J.Flenley 氏との共著、Vol. 184 pp. 1~3 (すべて安田執筆) 環太平洋生命文明圏の存在を初めて指摘したもの。Milkless civilization の指摘が話題になった。(査読あり)。
8" Development and distribution of Castanea and Aesculus culture during the Jomon Period in Japan"	共著	2008年1月	"Quaternary International", Elsevier	J.Kitagawa 氏との共著、Vol. 184 pp.41~55 (北川氏との共同執筆)日本の縄文文化がクリとトチなどの堅果類の半栽培に生業の基盤があったことを花粉分析の結果から立証。(査読あり)。
9" Spatial biome changes in southwestern Japan since the Last Glacial Maximum"	共著	2008年1月	"Quaternary International", Elsevier	K.Gotanda 氏との共著論文、Vol. 184 pp. 84~93 (五反田氏との共同執筆) 最終氷期最盛期以降の日本列島の植生変遷をバイオーム法により明快に明らかにした。(査読あり)。
10"Climate change and the origin and development of rice cultivation in the Yangtze River basin, China"	単著	2008年11月	"AMBIO", Royal Swedish Academy of Sciences 『第四紀研究』、日本第四紀学会	ファースト・オーサー論文、Vol.37 pp.502~506 稲作農耕の起源が1万年以上前までさかのぼることを実証した。ロイヤルコロキアムを特集したもので、スウェーデン王も寄稿している。(査読あり)。
11 「環太平洋生命文明圏」	共著	2012年8月		ファースト・オーサー論文、米延仁志、山田和芳、那須浩郎、篠塚良嗣、森勇一、ホーヒムストラ各氏との共著、Vol.51 pp.285~294 (すべて安田執筆) 環太平洋には生命を畏敬する共通の世界観があり、そこには環太平洋生命文明圏と呼ぶことができる文明圏を設定できることを指摘した。(査読あり)。